

# かささぎ通信 第124号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 4月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年三月の「森三郎の作品を読む会」では「鸚鵡(おうむ)」  
『赤い鳥』[1936.10] 所収作と『かささぎ物語』帝国教育会出版部  
[1942.8] 所収作)の読み比べをしました。

「鸚鵡(おうむ)」の初出は『赤い鳥』の鈴木三重吉追悼号です。

鈴木三重吉が一九三六年六月二十七日に亡くなった後、およそ三か月後の十月一日発行の「追悼号」を二十五歳の森三郎は一人で編集しました。三郎自身の作品は九作載っています。「創刊から休刊までを一望できる充実した誌面」(酒井晶代「森三郎」『赤い鳥事典』)であり、三郎の九作品の中にも、『赤い鳥』に掲載された自身の作品との関連を思わせる物がいくつかあります。編集者の立場からは自作の活字号数を小さくしたり、行間を狭めたりと苦心の跡がうかがえます。特に「鸚鵡」は、坪田譲治の「石屋さん」七ページ分をはさんで、その前後に分かれて小さい活字で二ページ分の作品です。これまでの『赤い鳥』の体裁に合わせて、坪田作品は見開きで始まるように組んだ結果の余白のページを使っているわけです。

「鸚鵡」は辻乙四郎の名前で発表しています。この名前は「むじなの仇討」「桐壺宰相」「赤鬼青鬼」「猿酒」「夕顔物語」などの昔話や古典の題材から採った作品の作者として使われてきました。

「鸚鵡」の舞台は江戸時代で、願人坊主が登場します。作者は、この願人坊主を「素はだかの上に衣を着て錫杖をジャリン／＼と鳴らして回ってきて、『さあんげ、さんげ(散華)』と歌いながらお金をもらって歩くお坊さん」と説明しています。これは個人の名前ではなく、『国史大辞典』によれば、「江戸時代、諸国を徘徊して門付・大道の芸能に携わった下級の宗教者」の呼び名です。「水垢離・百度参などの神仏への願かけの代理をつとめた者」で、この代理人が裸になって街頭に出て、「スタスタ坊主のくる時は世の中よいとは申します」などの祝言を歌ったりしたそうです。「鸚鵡」の中でも「願人坊主に追っかけられると、福がくる」という言い伝えを使っています。しかし、他にも三番叟凧、ご朱

印船、呂宋(ルソン)、キリシタン禁止、籐丸籠、切支丹屋敷など、時代の様相を示す言葉が出て来て、子どもが読むにはなかなか難解です。

「鸚鵡」の話の中で、願人坊主が歌いながらやっていると、子どもたちは逃げ支度をしながら「願人坊主やあい」とはやし立てるのが常のことです。主人公の長吉は駆け出すはずみに転んでしまい、願人につかまってどこか遠くへ売られるのではないかとドキドキします。しかし、願人坊主は長吉を捕まえたりせずに通り過ぎていきました。家に帰ると、偶然、以前長吉の家で働いていたお玉が、ルソン土産の珍しい鸚鵡を長吉に持ってきてくれました。願人に追いかけて福がきたことになったわけです。夜、長吉は夢を見ます。願人坊主の顔をした役人や、鸚鵡に似たような顔の異人の女の人が登場する不思議な夢でした。

ここまで来ると、森三郎の「うんすんガルタ」(『赤い鳥』一九三三年二月)の登場人物を思い出します(「かささぎ通信」第120号参照)。名前は同じ長吉です。南蛮渡来の珍しいうんすんガルタや鸚鵡を手に入れた喜びと、ちよつと不安な思い。三郎はその気持ちをどちらの作品でも、夢の中の不思議な人物関係として描いています。「うんすんガルタ」には一時の気紛れで軽はずみな約束をした少年の心の動揺が描かれています。「願人坊主」の長吉はまだ幼くて、そこまでの思いはありません。しかし三郎はかつて描いたのと類似の道具立ての作品をこの「追悼号」に発表し、三重吉先生のことを偲んでいるのではないのでしょうか。「うんすんガルタ」について三重吉は「うんすんガルタはおもしろい構想です。幻影のところなどもたくみに書いてあります。全たいにわたり多少私の手もはいつています」と評を付けています(三三年二月号)。三郎は追悼号の後書きに、もう先生の校正が入らない寂しさを吐露しています。

帝国教育会出版部の「鸚鵡」は、願人坊主の錫杖の擬音語や、歌を加えて、生き生きさせていますが、全体に子どもには難しさが残ります。

次回予定 二〇二三年五月十二日(金)午後一時半〜三時半

「簪(かんざし)」「うぐわすの謡」(『うぐわすの謡』[1943.8] 所収)